

群 教 セ	G06 - 02
	平 29. 265 集
	体育

対話による運動技能の向上を 楽しむことができる児童の育成

—対話が進む指導の工夫—

特別研修員 小澤 康通

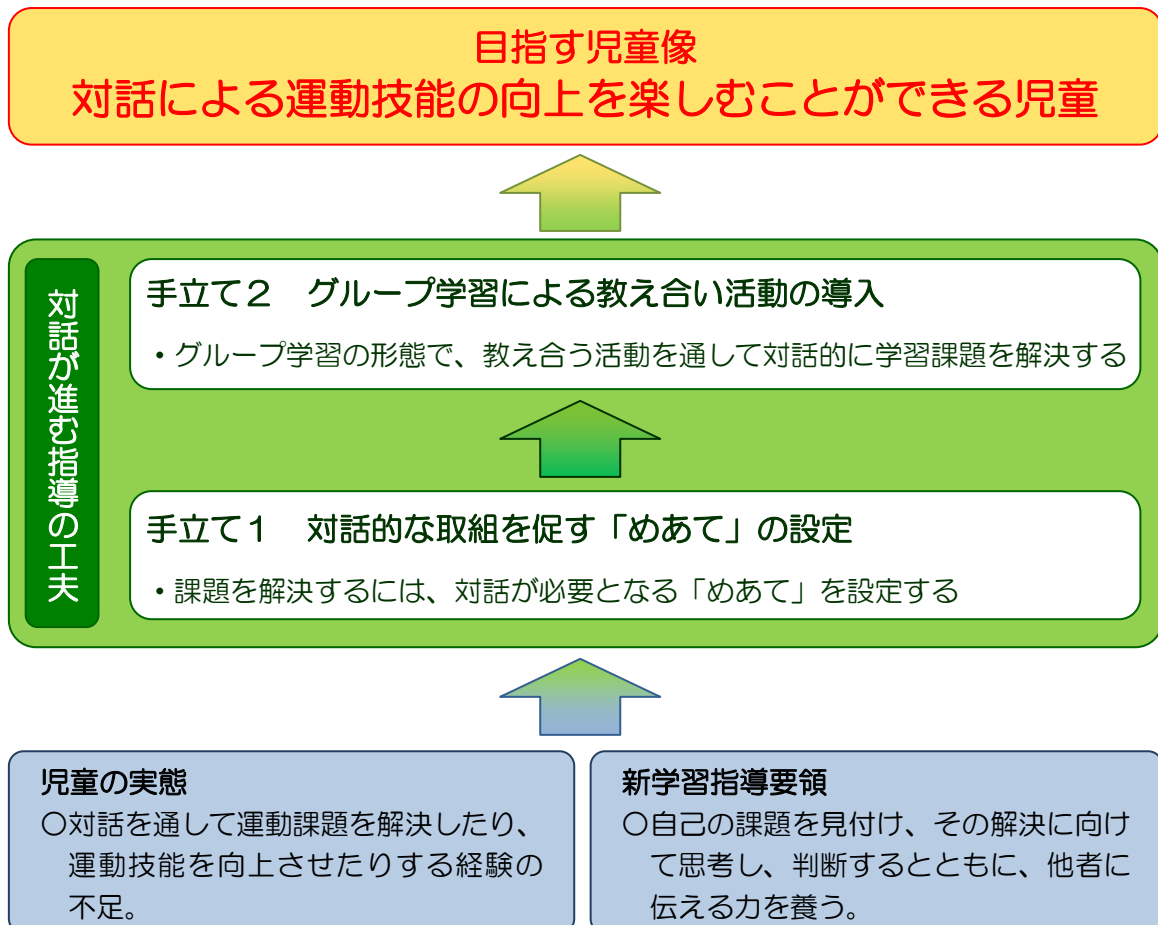
I 研究テーマ設定の理由

新学習指導要領における体育の目標では、「豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力」を育成することを目指して、新たに「自己の課題を見付け、その解決に向けて思考し、判断するとともに他者に伝える力を養う」ことを挙げている。各運動領域の内容にも「課題を見付ける」「考えたことを友達に伝える」「友達の考えを認める」など、自ら課題を見付け、他者との対話的な関わりを重視した表現が多く盛り込まれている。これはスポーツに生涯を通じて親しむ資質・能力を育成するためには、知識・技能の習得だけではなく、自己の運動課題は何かを自ら分析したり、他者と対話的に関わり合ったりする活動が、一層重視されるようになったからだと考えられる。

そこで、課題解決のためには対話が必要となるめあてを設定したり、グループ学習の形態で教え合う活動をしったりすることで、課題を解決するには友達との対話が効果的であることに気付くとともに、対話を通して運動技能を向上させることの楽しさを味わうことができるであろうと考え、本研究テーマを設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

対話が進む指導の工夫として、次の二つの手立てを講じた。

- | |
|-------------------------|
| 手立て1 対話的な取組を促す「めあて」の設定 |
| 手立て2 グループ学習による教え合い活動の導入 |

手立て1は、対話的な取組を促す工夫として、友達とアドバイスし合って跳び箱運動の動きを大きくするというめあてを設定し、大きくする動きと、大きくするためのコツを考えさせた。着手時に脚を大きく広げられたのか、足腰を高く上げられたのか、跳躍者本人は分かりづらいが、見てくれた児童との対話を通して、動きを確認することができる。大きくできる動きが複数あることから、思考の深まり、多様な動きの広がり、発展技へのつながりも期待できる。

手立て2は、グループ学習の形態で、教え合う活動に取り組む。グループ学習にすることで、跳躍する児童、見る児童の役割が明確になるとともに、友達の運動技能の変容にも気付きやすくなる。グループの編制は、技能習熟の異なる児童3～4名で構成した。跳び箱運動が得意な児童は、自ら手本を見せたり、跳び箱運動の技能をアドバイスしたりできるであろう。また、跳び箱運動が苦手な児童も友達が大きくしたい動きに注目することで、動きがどうなっていたかを伝えることができる。それぞれが役割を果たすことで自己有用感を高めることができる。

これらの活動を通して、対話的に運動技能を向上させることの楽しさを味わうことができると考えた。

III 研究のまとめ

1 成果

- 大きくする動きは個々の能力に応じて様々であったが、大きくするためのコツを挙げさせると「助走を速く」、「踏み切りは強く」に絞られた。この二つの技能を意識して取り組んだことで、跳び箱運動の動きが大きくなるとともに、多くの技の習得に結び付いた（表1）。
- グループ学習による教え合い活動を導入したことで、跳躍者本人も気付かなかった癖を指摘し、改善させたり、できない理由となる動きをやって見せたりするなど、グループの仲間の技能を高めようと熱心に教え合う様子が随所に見られた。
- 授業後、跳び箱が楽しいと答えた児童が増え、楽しくないと答えた児童はいなくなった（表2）。楽しい理由も授業前は「跳べるとうれしいから」がほとんどであったが、授業後は「友達とアドバイスし合ってきたから」、「できないとアドバイスし合って楽しいから」と記述する児童が現れた。対話的な学習を通して、仲間と関わり合って技能を向上させる楽しさを味わうことができた。

表1 次の技ができますか

	開脚跳び	台上前転	かかえ込み跳び
できる	22人→30人	10人→28人	10人→17人
できない	8人→0人	20人→2人	20人→13人

(授業前→授業後)

表2 跳び箱運動は楽しいですか

楽しい	15人→26人
どちらでもない	9人→4人
楽しくない	6人→0人

(授業前→授業後)

2 課題

- 児童が教え合い活動で大きくしたい動きに応じて場の工夫ができないときは、教師が場の工夫を紹介するなどの支援をする必要があった。
- 動きを大きくすることは発展技につながっていくことを、授業のまとめの場面で紹介したが、中盤に伝えることで、大きくすることのメリットを理解し、後半の活動がより活発になったと考えられる。
- 教え合い活動を導入した授業では、児童の実態や活動状況に応じて、教師がどのタイミングでどのような支援をすることが学習効果を高めるために効果的か、研究を深める必要がある。

実践例

1 単元名 「跳び箱運動」 (第4学年・2学期)

2 本単元について

跳び箱運動は、手で支えて跳び越したり、回転したりする非日常的な動きが楽しい運動である。自分の力に合った課題を設定し、技を身に付けたり、今できる技をより大きくしたりするのが楽しい運動である。基本的な支持跳び越し技をするには、助走を生かした踏み切りや、体重を支える力、台上でのバランス感覚など様々な運動要素が求められる。また、他者から自分の動きがどうなっているのか見てもらったり、どうしたら跳べるかアドバイスしてもらったりすることで、技能をより高めることができる。

以上のような考えから、本題材では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	○基本的な支持跳び越し技の楽しさや喜びに触れ、その技ができるようにする。 ○跳び箱運動に進んで取り組み、きまりを守り、仲良く運動したり、場や器械・器具の安全に気を付けたりすることができるようにする。 ○自分の力に合った課題を持ち、技ができるようにするための活動を工夫できるようにする。	
評価 規 準	関心・意欲・態度	跳び箱運動の楽しさや喜びに触れることができるよう、進んで取り組むとともに、決まりを守り、仲良く運動をしようとしたり、運動する場や器械・器具の安全を確かめようとしたりしている。
	思考・判断	自分の力に合った課題を持ち、技ができるようにするための運動の行い方を工夫している。
	技能	自分の力に合った基本的な支持跳び越し技ができる。
過程	時間	主な学習活動
課題把握	第1時 ～2時	<ul style="list-style-type: none"> ・跳び箱運動に必要な基本的な運動技能を養う補助運動を行う。 ・跳び箱を使った運動遊びを通して、跳び箱運動の楽しさを味わう。 ・場の設定の仕方を知り、安全に学習するためのマナーを確認する。
	第3時 ～4時	<ul style="list-style-type: none"> ・開脚跳びをできるようにしたり、より大きくできるようにしたりするためにはどうしたら良いか、グループの友達と教え合いながら学習する。
課題 追究	第5時	<ul style="list-style-type: none"> ・台上前転をできるようにしたり、より大きくできるようにしたりするためにはどうしたら良いか、グループの友達と教え合いながら学習する。
	第6時 ～8時	<ul style="list-style-type: none"> ・大きな開脚跳びや大きな台上前転、かかえ込み跳びなど、自己の能力に適した課題を設定して、友達と教え合いながら学習する。
まとめ	第9時	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の力に合った技を選んで発表する。

3 本時及び具体化した手立てについて

本時は全9時間計画の第4時に当たる。本時では開脚跳びの動きを大きくするというねらいを達成できるようにするため、次の手立てを具体化した。

手立て1 対話的な取組を促す「めあて」の設定

- ・「友達とアドバイスし合って、開きゃくとびの動きを大きくしよう」というめあてを設定。
- ・助走から着地までの動きの中から、大きくする動きと、大きくするためのコツを考える。
- ・大きくしたい動きを友達に伝えて、見てもらい、対話を通して動きを確認する。

手立て2 グループ学習による教え合い活動の導入

- ・技能習熟の異なる児童3～4人で構成されたグループを編制する。
- ・どの動きを大きくしたら良いのか分からない時は、グループの友達と相談する。
- ・動きを大きくするコツは何か、グループの友達と見合い、気付いたことを教え合う。

4 授業の実際

本時は、前時に学習した開脚跳びの動きを大きくすることをねらいとした。授業の展開は「課題追究1 → 発表・実演 → 課題追究2」とした。課題追究1では、大きくしたい動きを考えたら、グループ学習の形態で教え合う活動を行う。発表・実演では、課題追究1で大きくした動きとそのコツを発表し、全児童で大きくできる動きとコツを共有する。課題追究2では、自分の課題を更に追究したり、他の児童が考えた動きに挑戦したりする。

(1) 手立て1 対話的な取組を促す「めあて」の設定

対話的な取組を促す工夫として、「友達とアドバイスし合って、開きやくとびの動きを大きくしよう」というめあてを設定した。前時に、跳び箱には「助走、踏み切り、空中①、着手、空中②、着地」の局面があることを学習した（空中①は一般的には第一空中局面と呼ばれているが、易しい表現にした。空中②も同様）。この助走から着地までの一連の動きの中から、どの局面のどの動きでもよいので、自分が大きくできそうな動きは何か考えさせた。また、その動きを大きくするためのコツも考えさせた。ワークシートは開脚跳びの各局面の絵と、大きくしたい動き・コツが記述できる枠を設け、自由に記入させた（6ページ）。大きくしたい動きについては運動活動前に考えワークシートに記入させるが、大きくするためのコツは活動しながら気付いたことを記入するようにした。

友達には自分の大きくしたい動きを必ず伝え、跳び終わったら大きくできたか確認させた（図1）。跳躍者本人は動きが大きくなったのか自分では分かりづらいが、友達との対話を通して自分の動きを確認することができた。また、アドバイスする児童も、大きくしたい動きに視点を絞って友達の跳躍を見ることで、助走スピードと大きな跳躍との相関性など、様々な気付きが生まれ、跳び箱運動のメカニズムへの理解を深めることができた。

児童はこれまで、器械運動領域において、決められた技を幾つか提示され、その技ができるようにすることをめあてに設定された学習活動に取り組むことが多かった。本時では、大きくできる動きを自分で考える活動を取り入れたことで、思考を巡らせ、自己決定した課題を解決しようと、主体的に取り組むことができた。また、コツを考えさせることで、動きを大きくするための技能への理解が深まり、友達に具体的なアドバイスをすることができた。発表・実演の場面では、複数の大きくする動きやコツが発表され、課題追究1でそれぞれが取り組んだ学習内容を、全員で共有した（表3）。

発表を受け、課題追究2の場面では、自分の考えた動きだけでなく、友達が考えた動きに挑戦したり（図2）、スピードの速い助走や強い踏み切りを意識したりする児童も見られた。



図1 跳んだ後、自分の動きを確認する様子

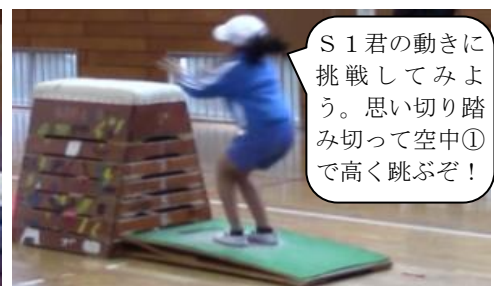


図2 友達が考えた動きに挑戦する様子

表3 発表・実演の場面での児童の発言

S1：僕の大きくする動きは「空中①で高く跳ぶ」で、コツは「踏み切りで思い切り体重を乗せて跳ぶ」です。
S2：私の大きくする動きは「着手の時脚を大きく広げる」です。コツは分かりませんでした。
S3：私は、着手の時脚を大きく広げるコツは「手を奥に着くこと」だと思います。
S4：S3さんに付け足しで、コツは「思い切り踏み切ること」だと思います。
S5：僕の大きくする動きは「空中②で脚を大きく広げる」で、コツは「助走のスピードを速くする」です。
S6：私の大きくする動きは「空中②で膝を伸ばす」で、コツは「思い切り踏み切る」です。

(2) 手立て2 グループ学習による教え合い活動の導入

課題追究1の場面では、最初に大きくしたい動きを考えてから運動活動に入るが、どの動きを大きくしたら良いのか分からない児童もいた。グループ学習の形態を取ったことで、友達と相談して自分が大きくする動きを決定でき、運動活動に入ることができた(図3)。

技能習熟の異なる児童でグループを編制したことで、跳び箱運動が得意な児童は、跳び箱を跳べない理由となっている動きを再現して見せたり、手を着く位置を示したりするなど、友達の技能が向上するよう熱心に教える姿が見られた(図4)。跳び箱運動が苦手な児童も、跳躍する児童の大きくしたい動きに注目して見て、伝えることができた。また、技能向上の妨げとなる動きの癖を指摘する児童も見られた。着手の際の手が前後にずれていることを身振り手振りを交えて伝え、改善させることができた(図5)。

様々なアドバイスを受け、多くの児童が技能を向上させ、その際には自然と拍手が起こった。対話的活動は単なる技能の伝達、向上に留まらず、励まし合ったり、コミュニケーション能力を高めたりするのにも有効であった。一人で課題を追究するより、友達と教え合う方が運動技能が向上することを実感するとともに、楽しく運動に取り組めることも体感できた。

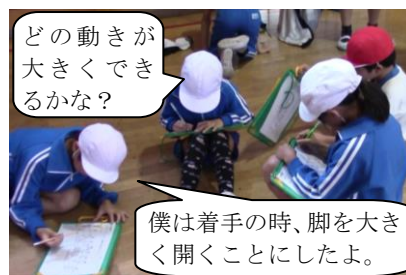


図3 課題を決める様子



図4 着手位置をアドバイスする様子



図5 着手の手のずれを指摘する様子と改善された跳躍

5 考察

手立て1では、大きくしたい動きを友達に伝えて見てもらい、跳躍後どうだったか確認することで、対話的な学習活動を展開することができた。また、動きを大きくするためのコツを考えさせたことで、助走スピードを生かした力強い踏み切りの重要性に気付き、多くの技の習得に結び付いた。自分の能力に応じて、大きくできる動きは何か自己決定させる活動により、主体的な取組を引き出すことができた。

手立て2では、技能習熟度別のグループ編制にしたことで、跳び箱運動が得意な児童は、苦手な友達の技能を高めるために、様々なアドバイスをすることができた。苦手な児童も、得意な児童の大きくしたい動きに注視し、気付いたことを伝え、自分の役割を果たそうとしていた。また、技能向上の妨げとなる動きの癖を指摘し、改善させる活動が見られるなど、想定以上の成果があった。

課題としては、教員が支援する場面のタイミングである。児童の教え合い活動だけでは、技術的なアドバイスやつまづきに対する場の工夫など、足りない部分が当然出てくる。着地のマットに目印を付ける着地距離の可視化は、最初に紹介してしまうと着地距離の競い合い一辺倒になってしまう恐れがあるため紹介しなかった。しかし、発表・実演の場面で助走スピードを速くすると第二空中局面で脚を大きく広げられるという考えが発表された際、教員が着地場所も遠くなることに気付かせた上で、着地のマットに目印を付けることを提案すれば、課題追究2の活動はより活発になったと考えられる。また、動きを大きくするメリットを紹介するタイミングも重要であった。本時では、開脚跳びの第一空中局面で腰を高く上げられると、かかえ込み跳びに発展することを、授業のまとめの場面で紹介した。最初に伝えてしまうと、どの動きを大きくしたらよいか示してしまうと考えたからである。しかし、発表・実演の場面で紹介し、動きを大きくすることのメリットを理解させれば、課題追究2の場面でより意欲的に取り組めたのではないかと考えられる。教え合い活動を導入した授業では、児童の実態や活動状況に応じて、教師がどのタイミングでどのような支援をすることが学習効果を高めるために効果的か、研究を深める必要がある。

6 資料

(1) 跳び箱運動に必要な基本的な運動感覚を養う準備運動

跳び箱運動に必要な基本的な運動感覚を養うために、準備運動で、体を支える、回転する、跳ぶ、着地するといった補助運動をサーキット形式で行った（図6）。

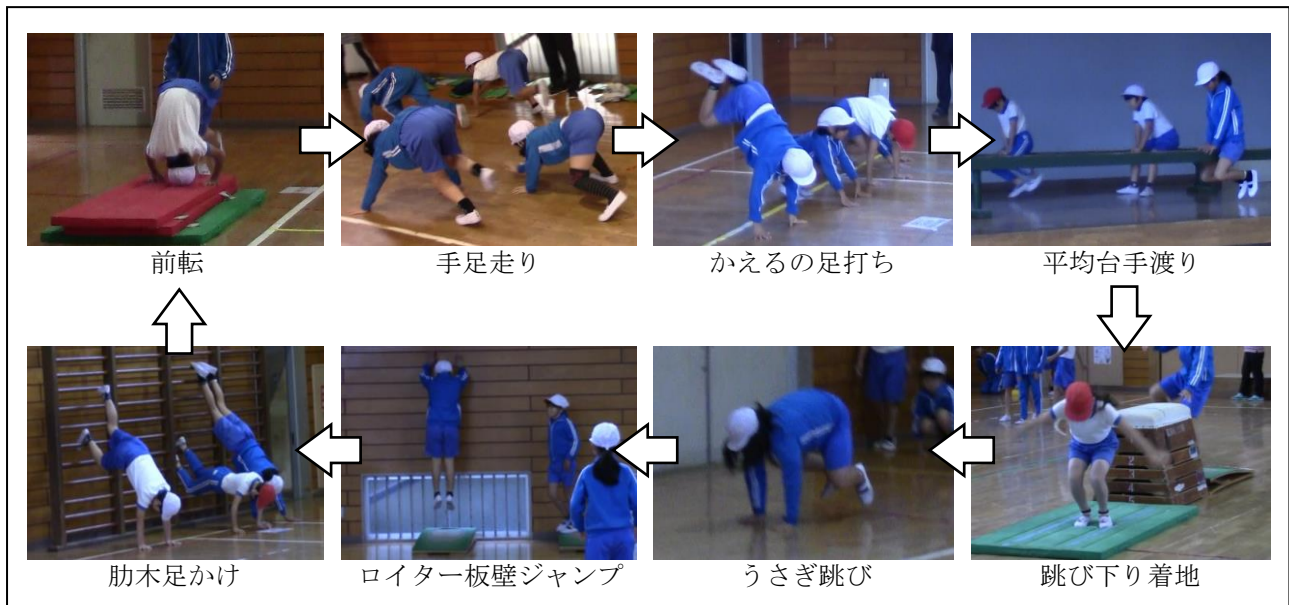


図6 運動感覚を養う準備運動の様子

(2) 本実践で使用したワークシート

とび箱運動	名前 _____
<p>めあて</p> <p>友達とアドバイスし合って、開きやくとびの動きを大きくしよう。</p>	
<p>開きやくとび</p>	
<p>① 大きくする動き</p> <div style="border: 1px solid black; height: 100px; width: 100%;"></div>	<p>② ①の動きを大きくするためのコツ</p> <div style="border: 1px solid black; height: 100px; width: 100%;"></div>